

えんぽとたんぽの始発駅 里山ビオトープ二俣瀬	会 報 第 222 号	2020年1月23日 里山ビオトープ二俣瀬をつくる会 編集責任者：原谷 一誠
---------------------------	-------------	--

1. 活動報告（事務局 記）

- 12月28日（土）水車給水塔(旧)の解体および除去草の処理を行いました。作業の後、“創設20周年記念イベント”についての打ち合わせを実施し日程の確認を行いました。引き続き懇親会を実施し、1年の締めくくりとしました。参加者は、16名です。
- 1月8日～15日 活動外の動きです。市民センター・永山酒蔵の門松片づけの真砂土をビオトープ降り口通路補修に頂き実施しました。また草原水車周囲の修復土（真砂土）1,5屯ほど厚東商会と地域の協力者の手で搬入して頂きました。
- 1月18日（土）10名が参加し、ため池内の除草、観察路に仮置きされていた除去草の処理を実施しました。なお作業前に、20周年記念イベントについて、原田会長および原谷事務局の作成された資料を基に協議をしました。

2. 今後の予定（事務局 記）

- ◎行 事
- 2月2日（日）維持活動（修復作業）
- 2月15日（土）維持活動（エコアップ、修復作業）

3. 来訪者の声

今回はありません。

4. 会員の声ー1 「年頭のご挨拶」（原田満洲夫 記）

令和2年新年のご挨拶を申し上げます。今年もよろしくお願いいたします。

今年は「里山ビオトープ二俣瀬をつくる会」にとって大きな節目の年となります。昨年度より原田前会長ご逝去によりこの節目の時に大きな役目を引き受けましたが、皆様のおかげをもちまして通常の活動も順調に推移し「里山ビオトープ二俣瀬」の創設20周年記念イベントの準備も着々と進んでおります。

通常の活動も創設時の様にはいきませんが、ビオトープ本体の植生の変化や設備の老朽化・会員の減少と高齢化等々で取り残されている状況も認めざるを得ません。会員の皆様も色々努力をし、活動日以外の個人活動・活動日の追加・他団体のボランティア活動ご協力等を以って何とか維持管理を継続していると思います。

本年は、まず20周年を迎え創設時と如何に変化したか良く見極め、今年を1サイクルの始めと考えると創設時に戻す事に努力したい。例えば ①草原ゾーンの水車更新（現在進行中） ②ため池ゾーンの浚渫 ③湿地帯の外来植物の機械による駆除 ④須賀河内川の消えた魚類を厚東川本流からの移動などを提案したい。これらは現在の会参加会員だけでは行えないこともあり会員活動以外に予算を採って業者依頼も考えたい。

会員の声—2 「新年度に思う」 (管 哲郎 記)

皆様、あけましておめでとうございます。新年号も令和2年となりました。干支も一回りし新たな12支の始まりです。私は昨年の子年男でイノシシ年生まれでしたが、今年はネズミ年ですので、ちょこちょこ気ぜわしく動き回らねばならなくなりそうですね。

何といっても今年はビオトープ開設20周年で、11月の記念行事に向け、会長以下役員の方々は何につけ忙しくなりそうです、皆様も力を合わせ行事が無事に終わりますよう、ご協力をお願いいたします。シンボルとなります水車が、無事に復元されることを願います。

20年といえますと、発足当時50歳の方々も70歳となりました。ご覧のように年々維持管理作業に来られる方が限定され、人数も少なくなり固定化してきました。せっかく宇部市より土地を確保していただきましたが、維持活動が困難となってきましたので、場内の整備が追いつかなくなっています。維持管理作業の中でも「草刈り作業」などは簡単な作業と思えるようになってきました、ビオトープには湿地帯やため池、小川があり、その中に生えてくる水草を除去する作業に手を取られます。泥の中に根を張ったところを掘り取らねばなりません、水草の茎を刈り取れば作業は早いのですが、あっという間に元に戻ってしまいます。1月～4月の4か月間はこの維持管理作業が続きます。小雨でも、気温1度の寒さの中でも、池の中に入っている作業です。これを怠りますと、子供たちが安心して遊べるフィールドにはならないのです。

ビオトープを維持してゆくには、私たち「ビオトープをつくる会」の存在意義を理解し、協力願える若い力が必要です。土、日は休養日ですので無理は言えませんが、毎回出席しなくても、1回/月で十分です、そのような新戦力をリクルートしたいと考えますが、会員の皆様にもこのことを十分にご理解いただき、一人でも多くの会員を捜していただきたいと思います。皆様のよい知恵があればぜひ、お寄せください。本年もよろしくをお願いいたします。

5. ビオトープ関連：「山口県の昆虫たち」 (管 哲郎 記)

(47) キオビクモバチ *Batozonellus annulatus* (クモバチ科 クモバチ亜科)

体長23～28mm、本州、四国、九州、沖縄に分布し、主にコガネグモ類を狩ります。体色は黒ですが顔や胸、翅も手足が黄褐色をしているので結構見つけやすいハチです。というも飛ぶ姿は見つけにくく、常に地面を這っている印象があり、黄褐色の色が見つけやすいからです。

似たハチにモンクモバチがありますが、翅全体が褐色をしているので区別がつかます。クモを狩る”クモバチ“がいるなど全く知りませんで、自分の体より大きなクモを引きずって動くさまには驚いたものです。おかげで“狩りバチ”に興味をわきチャンスがあれば観察し生態写真を撮り続けていますが、動きが素早くとても難しいのが現状です。



自分より大きなクモを引っ張るキオビクモバチ 萩市福井下

引用・参考文献

田仲義弘、2012. 狩蜂生態図鑑. 192pp. (株) 全国農村教育協会. 東京.
藤丸篤夫、2014. ハチハンドブック. 104pp. (株) 文一総合出版. 東京.

6. 会よりの連絡事項

- 1) 作業日は、第一日曜りと第三土曜日を主体に計画されていますが、これは観察隊を第三土曜日に行うことを前提にしているためです。しかし観察隊のない冬は、第三土曜日が作業日となりますが、勤務の都合なのか参加者が少ないです。そこで、冬は第三日曜日に変更すれば参加者も増えるのではないかという意見が出ています。皆様、来年度の作業計画日について、考えてみてください。総会までには決めたいと思います。

7. 編集後記 (松本 フデ子 記)

令和初新年、小雨の中迎えた初活動。今年は創立 20 周年の記念イベントを行う一大行事を計画、話し合いを繰り返しながら準備を進めていく事に。過ぎてみるとあっと言う間の 20 年間だったように思われる。維持管理していく事の大変さを身にしみて感じながら。

イノシシは池や湿地あちこち掘り返している。池のそばの通路には森からのドングリの絨毯が出来ている。暖冬の為かもうアカガエルが孵化しているとのこと。ウメモドキの紅い実や枝に残る小さな柿がビオトープに色を添えている。東屋のそばでは椿が静かに咲き誇っている、竹久夢二が描いた花の様に。